
赤い目が見たもの。

MMM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い目が見たもの。

【Nコード】

N7879Y

【作者名】

MMM

【あらすじ】

記憶を失った少女は目が覚めると白い砂漠と真っ暗な空以外何も
ない世界を見た。誰でも感想を送れます。

1・1（前書き）

話が飛んでいるところがあるかも知れませんが、すみません。そこは許してください。

拙く、構成も変なところがありますがよろしく願います。また、指摘したい場合はいつでもお願いします。

何も無い、ただ丸い月だけが光っているロマンチックの口の字もない寂しい夜空の下で私は目覚めた。

白い月の明かりが眩しく感じたのはたったの数秒。

猫のように腰を曲げて横たわっている私はず見たのが白と黒の境界線だった。白い砂漠と真っ暗な夜空が混じり合うことなくただ対立しあって見える。

寝ている間に入ったと思う口の中の砂を咳で吐き出す。砂の味はじやりじやりしていてそことなく気分が悪かった。

それから長い黒髪に絡まった砂を落とす。絡まっていた砂は思ったより少なく髪を少し揺らしただけですべて落ちた。

まだ疲れているのか、単に起きたばかりで頭が機能してないのか横たわっていた体を上半身起こしたまま私はぼんやりとしていた。頭が痛い。それだけ思っていた。

私がぼんやりと眺めていたのは、いつまでも続く白い砂漠と闇に包まれた夜空。それしか見るものがなかった。

ぼつりぼつり岩や枯れた細い木が見えたがそんなのは無いに等しいぐらいに見える。

少し目を凝らして見ると何か動くものが見えたような気がしたけど気のせいだと思って無視した。

それから景色を眺めてぼんやりと脳が機能するまで眺めていたけどやっと少し頭が活動したところで気づいたことがあった。

ここ、どこだろう。

少し不安になった。こんな見知らぬ場所になんているのだろう。

無意識のうち理由を脳に検索しても出てこない。それ以前に、自分が自分が起こしたことについての言わば前に何の行動をしていたかの記憶を持っていないことにやっと気が付いた。

あれ、なんで記憶がないの？ 私、寝る前は何をやっていたの？ そんな質問が自分の中で飛び回る。質問には記憶が無いのだから当たり前だけど答えられなかった。

答えられないと理解しているはずなのになぜか未だに質問を自分の中で忙しく飛び回っている。

色々と推測と言うより想像はいくらか考えられる。でも正確な答えは出せない。出せられるはずがない。

今の私の脳はマシガンのようにどんどん出て来る質問とそれに対する数多くの推測でこんがらがっている。

「ああ、もっつ！」と叫んで自分の髪をくしゃくしゃにしてみる。髪はすぐに元には戻られなかった。

私はしばらくの間、少し自分を落ち着かせることと髪を戻すことに時間を掛けてしまっていた。

少し落ち着いた後、重く感じる体を無理矢理立たせて歩いてみる。考えても理由なんて出てこないのだから今は気分を少しでも良くした方が良くと選択し、判断した。

歩いてみると汚い布きれを見つけた。私は少しだけでも肌の露出を抑えようと体を纏うとあることに気が付く。

胸にすっぽりと綺麗に丸い孔が開いていた。

人間には普通、胸とかに孔なんて無い。

でもなぜかそれが当たり前のように感じている。何でだろう？

新たな疑問を抱えながらも布が落ちないようにしっかりと結んだ。

それからもぶらぶらと歩いて行き疲れたら座って休み、少し休んだらまた歩いて疲れたらまた少し休む、のループを繰り返していた。歩き出してから長い時間が経ったと思う。十時間以上ぐらい。それでも地平線までずっと白い砂で出来た砂漠だった。それより景色

が変わってないように見える。目の錯覚だと思うけど。

「……疲れたなあ」

実際こんな歩いていたら途中休みを少し入れても疲れるに決まっている。

そのため今日ここまでにしようと思い、体に纏わせている布が切れないように横たわって目をつぶる。

……眠れる気がしない。とても疲れているのに。

どうも頭の中がまだ疑問の海で覆い尽くされている。記憶のことについては起きたばかりの時よりは気が少し楽になったためか減っている。

今の主役の疑問はこの世界について。

自分の体内時間でおおよその時間だけど十時間は歩いたのに太陽は昇ってこなかった。月はずっと同じ場所にいる。それとずっと歩いていたのに生きているものを見つけることが出来なかった。

後は、自分の存在について。

なんで私の胸には孔が開いているのに生きていられるのか、なぜあんなところで寝ていたのか、等々。そんな内容が頭を蹂躪していた。

この世界は疑問が多すぎる。そのほとんどが常識から離れていた。考えれば考えるほど眠気を誘っている脳がどんどん起きてしまったので考えることをやめて目をぎゅうとつぶった。

今度こそ眠れますように、と思いながら。

あれからどれくらい寝たのだろう。月は寝たときとずっと同じ場所があるのでどれくらい経ったのか分からない。

欠伸を出し、目をこすって付いた目やにを落としてから周りを見渡してみる。何の変化もなかった。

体は寝たときよりも疲れているように感じる。だるくも感じた。歩くことにも無意識に体が嫌がる。

寝不足、という訳でもないのに。自然な目覚めをしたはずなのに。

またもや疑問が増えてしまった。

それでも何かが見つかるかも知れないと思って無理矢理体を立たせて昨日より少し遅めのペースで歩く。

それでも体は嫌がって進まないの横になって体力が回復するのを待った。

ただ横になっても体力が回復するどころか減ってきている感じがしている。

考えることも少しずつ億劫になってきた。

どうしよう、私。このまま死んじゃうのかななんて一瞬思ってしまった。

そんな考えはすぐに頭の中から捨てる。

そんなとき、後ろか砂を蹴る足音がじゃりじゃりと聞こえた。

「……………」

私はやっと人に会えるのかと思って聞こえた方へ目を向く。

振り向いて見えたものは

胸辺りに綺麗にすっぽりと丸い孔が開いている異形の化け物だった。

顔と思われるところには仮面らしきものを被っていた。息は少し荒く外見が影であり見えないためか怖さを強調している。

私はその化け物を見たとき一瞬怖じ気付いたがすぐに違うことを思う。

血が飲みたい、と。

渴望に似た感情を感じていた。歯が今すぐにも化け物の首筋に行こうとするかのように震えている。

化け物は私の顔を一瞬見て咆哮をする。それから私に向かって襲

いかかった。

私は欲望に負け、化け物が手を振りかざす直前までタイミングを讀んで化け物の後を取り、背中にしがみつく。そこから首のところまで少し上る。

化け物は落とそうと激しく体を揺らしたが私は必死にしがみついていた。

首のところまで行くと私はすぐさま歯を立てて欲望に従って頸動脈に噛みつき、血を吸う。

血を飲んでいると体力が戻りだるさは消えていった。それよりも私は、

(美味しい……………)

と満足していた。体を揺らして私を振り落とそうとした化け物はみるみる力を抜き、倒れる。

化け物から離れた私は口の中に残っている血を堪能していた。けど、ここでやっと気が付く。

今、私は、何を、した？

今やったことに口を手で押さえ立ちすくむ自分。倒れて息をしない化け物の亡骸。

口の中を未だに血が広がっている。

今の気持ちは満足感半分、罪悪感半分。

でもなんでだろう、こんなことをしたのにこれが当たり前だと、考える自分がいる。

まただ、なんでそう考える？ 今、私は命を奪ったのに。奪ったのに。

自暴自棄になりかかっている自分に気づき、落ち着こうと深呼吸を三回ぐらいやった。

それから落ち着きを取り戻した私は今の戦いで疑問に思ったことを考える。

あの化け物の胸には孔があった。それは同じく私の胸にも丸い孔がある。

するとこの世界は生きているものは胸に孔が空いているのが当たり前なんだろうか？
寝るまでずっとそのことを考えていた。

1・2(前書き)

よろしく願います。

あの化け物を吸い殺してから数日が経った。

私は何も変わっていないかのように白い砂漠の上をずっと歩き続けている。

間違えた。何も変わっていないのは違うな。

変わったと言えば私が化け物を殺した次の日から砂漠で歩いていると時々化け物が襲うようになった。そのとき私はすぐさま全力で走って逃げるか、少し血を吸っていることにしている。

私はどうも特異体質であって何日かに一回以上、一定量の血を飲まないと体調が悪くなる。そして限度を超えると血を飲みたいと渴望を感じてしまうらしい。あの化け物を殺した後も何回か吸い殺してしまったのでそのことに気が付いた。

血を飲むことはどうも嫌気がした。でも血を飲まないと体調が悪くなるしそれに、化け物だといえ殺してしまうことも嫌だった。

だから仕方なく化け物に会ったら血を吸うことを時々している。

余談だけど時々化け物同士で殺し合っているところを何度か目撃したことがあった。

化け物達は頭を食い干切ったり、締め殺したりなどして殺しあっている。なぜ同族が殺し合っているのか分からない。分からないけどあまりの残虐さに私はその光景を見ることが出来なくなってしまうた。

話は変わっちゃうけど、私は変わらず考えていた。この世界について。あの化け物達のことについて。そして　自分の存在について。

歩いている時も寝る前の少しの間でも、考えることはほとんどそ

れに当てられていた。

なぜこの世界はずっと夜なのか、私や化け物の胸には丸い孔が空いているのか、などそんな疑問が頭の中で飛び回っている。

その疑問に対する推測は建てられてもほとんどが妄想でいたりしていた。なので最後は考えても仕方ないと思つて目をつぶる。

そんな日々が続いた。

今日も月の光が少し眩しく感じた。起きたばかりの私は手を目に当てて光を遮る。

それから立つて体を纏っている薄汚い布きれを確認する。体を纏っているものがこれしかないから切れないように大事にしている。

いくらまだ一度も人に会つていなくても体をさらすことは嫌だった。それから完全に頭が覚醒すると当てもなく広く荒涼とした砂漠をいつも通り考えごとをしたり、今日こそ誰かに会えるといいな、とそんな淡い願いを持ちたりしながら歩く。

いつも考えているので時々出会う化け物に気づかないことがたまにあったから、今日は気を付けようと思いつながらる。

そしていつものように少し疲れたら休んでまた歩く。その繰り返し。

そんな誰も見つからず一人歩いていると思うこと。

(寂しいなあ……………)

それだけだった。他には何も思わない。孤独はこういうものなんだと私は初めて知った。

普段なら眠くなるまでそうやってしていたけど今日は違った。

眠くなる直前になにかしら宮殿らしきものが見えた。

宮殿は一部崩れており中からなにか光が見える。

もしかしたら人がいるかも知れない！

そう思つた私は疲れなんて忘れてその宮殿に一直線に走つていった。

……………近づいた気配すらない。

走っても走っても宮殿が大きく見えてこない。一瞬自分の目がおかしくなったのかと思ってしまうぐらいに。

起きた時から休みは入れたもののずっと歩いていることもあるので流石に体力がもう切れそうだった。がそこは気合で走る私だった。

宮殿の側まで走り切った私は肩で息をしていた。膝に手を乗せ体重を掛けながら息を整える。

宮殿に目を向けると感心してしまった。

ここまで大きかったんだ。

あまりの大きさだったから距離感が狂ったんだ。私はそう思う。息が整うと早速宮殿の中に入る。

中に入ると昼間のような明るい日光らしきものが降り注いだ。

夜に慣れていた私は今日起きた時よりも長い時間手で光りを遮る。やっと目が慣れると辺りを見回してみる。とても広い。

宮殿の中にも何個かの白い宮殿があるのにそれでもまだとてつもなく広がった。

敷地はそのまま白い砂漠のまま。

誰かいるかな、と期待をしていたけど気配がなくなったりする。

私はまだ一人ぼっちなんだ……。

そう思いながらも疲れた体を動かして寝る場所を探そうと辺りを歩く。

まずは白い宮殿の中へ風漬しに見る。

壊れているところがほとんどだったけど、一つだけ綺麗なところがあった。

中も全部白で統一されている。白い小さなクッションが三つほどあっただけであとは何もなかった。

今日は贅沢にクッションという柔らかい羽毛が入ったものを枕にして眠る。

次の日は宮殿の中をちょっと探検してみることにした。

まずはとても高い塔があったのでそこに行ってみることに。
入り口からすぐに螺旋階段が見えたのでひとまず登る。

……登らない方が良かった。

なめて掛かった私は多分四十階ぐらいのところまで疲れる。私は上を見上げて計算してみると、あとおよそ二十階ぐらいはあるように見えた。

それでも最上階へ登り切った私は部屋の中を見る。何十、いや何百？ いやもつとかなと思うぐらいの人が入れそうならいひの広さだった。

何か大地震が起こったかのように柱は何本か折れている。床は所々穴が開いている。

玉座らしき椅子はとても高いところにあつて昔ここに住んでいた王様が部下を見下ろすような視線を送っている景色が頭の中で浮かんだ。

その玉座のところに行つて座ってみる。玉座は何か大理石みたいな素材で出来ていてひんやりと冷たかった。

少しだけ王様になった気分になったけどそんな気分はすぐに消える。

誰もいない。

そんな事実があつた。

急に寂しいという単語が頭の中で繰り返し言われる。

何十秒かそんな雰囲気を出していたがすぐに思い直して玉座の間から出て今度は階段を下りる。

最下階まで降りて出ようとしたときに丁度床が腐っていたのかは分からないけど、私は踏んだところの床が崩れて落ちてしまった。
どしん。

「いてててて……」

私はお尻から落ちたから幸い怪我はなかったけどお尻が痛かった。しかも纏っているものが薄い布きれだから余計に痛く感じる。

私が落ちた穴に続いていたのは小さな部屋。

その部屋は薄い青の光が包まれていた。
私は階段がないか辺りを見回すとふとなにか円柱の形をしたものを見つける。

そこから光が発していると分かって近寄ってみる。
すると急に威圧感を感じて一瞬怖じ気付いた。

何だろう、今は。

そう思ってもう少し近寄ってみるとそこには。

セミロングの白い髪を持ち、お腹には私と同じ孔があった少女が水槽の中にいた。

彼女は酸素マスクを装着していて、目は開いていない。

私はその少女を見たあと、頭痛が襲う。

水槽、酸素マスク、水の中、睡眠導入剤、e t c .

頭の中で何かが思い出されようとした。したのだけと思い出されなかった。

何秒かして頭痛が治まると少女の方に目を向けるとさっきと同じような威圧感を感じた。

この少女から発しているのかな……？

でも少女からは意識を感じられない。眠っているようにしか見えなかった。

水槽のガラスに触れる。

ガラスを割り叩こうかな。そんな考えが出てきた。

でもなぜだか分からないけどガラスを割ったら少女が死んじゃうような気がして。

少女から一歩ずつ、一歩ずつ離れて再び階段を探す。

階段を見つけると何も考えずに急いで登った。すぐさま宮殿の中が続いていた。

そして宮殿の中の日に当てられながら私はこう思う。

あの少女は何だったんだろう？ と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7879y/>

赤い目が見たもの。

2011年11月26日01時46分発行